



—秋田の名作を尋ねて—

## 反戦平和小説 小牧近江『異国の戦争』

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

『異国の戦争』は、昭和5年11月に日本評論社から「新作長篇小説選集」の一冊として出版されたもので、B6版240ページ、定価50銭の軽装版であった。思想家小牧近江の唯一の小説であるが、刊行10日目には再刊が出たし、昭和55年10月には、かまくら春秋社から新版が発行された。読み継がれている小説である。

『異国の戦争』冒頭の「作者のことば」には次のごとくある。

『異国の戦争』は必ずしも作者の身上話ではない。まだ世の中の何であるかも知らなかった一青年が、ヨーロッパの悲劇をその発端から目撃したありのままの物語である。

その一青年が、秋田県土崎出身の小牧近江(1894～1978 本名：近江谷駟)で、明治43年、万国議員会議に出席する国会議員の父近江谷栄次に連れ出され、16歳でフランスに渡り、彼はそのままブルジョアの学校アンリ4世校に学ぶことになる。小牧の父は、日本は神国であるという帝国主義者であり、ナポレオンの崇拜者で、長男をナポレオン校と呼ばれるフランスの名門校で学ばせたかったのである。

それだけに『異国の戦争』のステージはフラン

スである。日本は、日清戦争にしろ、日露戦争にしろ、国外で戦ってきたために国民は戦争実感に乏しかった。これが、日本の国土で銃弾が飛び交い、目の前で父や子が戦いの刃を振りかざす光景が展開されていれば、日本人の戦争への意識は違っていたであろう。

物語では小牧は、谷と命名されているが、その日本人の谷がフランスという異国で戦争を体感する。そのレポートが『異国の戦争』である。

小牧が「作者のことば」で自らを「世の中の何であるかも知らなかった一青年」といったのは、小牧がヨーロッパに出発した明治43年の日本は、明治天皇暗殺計画の容疑で多数の社会主義者・アナキストが逮捕されており、翌年には幸徳秋水らに極刑が執行されたということに無知であったことを述べているのである。

谷がフランス入りした20世紀初頭は、ヨーロッパの国情も混乱していた。アフリカの北西部に位置するモロッコでは、王朝に先住民族ベルベル人が反旗を翻し混乱していた。フランスは鎮圧のためにしばしば出兵し、実質的には宗主国の地位を確立していた。しかし、モロッコにはドイツも野心があり、谷がフランス入りした翌年の1911年には、ドイツ政府はモロッコ南西の港湾都市アガディールに砲艦を派遣した。

フランス国内は一気にドイツへの戦闘意識が高まり、アンリ4世校では上級生の多くが軍の学校への進学を希望し、通学生の間では、ナポレオン党の色である紫色のネクタイが流行り出した。校内の黒板という黒板には、力いっぱい「ナポレオン万歳」と大書されていた。

日本人の谷まで、フランス軍に志願して大手柄を立てた夢を見た。しかし、寄宿舎の部屋で目が覚めると、隣のベッドにはドイツからの留学生でいつも校庭の片隅で小さくなっているエルンストがいた。谷はエルンストと銃を持って戦ったかと思うと寒気がした。

講堂には、学生が多数集結して「フランス万歳」、「ドイツを葬れ」と絶叫していた。しかし、谷と肩を並べ静かに天井を見つめているのは安南（インド支那）人のニュエン・ジャックであった。彼はハノイ付近の豪農の十一人兄弟の三番目であったが、他の兄弟より図抜けて優秀であったのでパリに留学させられたのだった。彼は法律家になって帰国するのが目的であった。ジャックはホテル住まいであったので、谷はそのホテルを訪問してみた。部屋は道路に面した三階で化粧間もある大きな室であった。

ジャックは「インド支那がフランスの植民地になってからすでに60年になる。母国語をローマ綴りでしか書けない」という。谷は漢字の読み書きができない自分を想像して唾然とした。谷はフランスとドイツはモロッコを自国の植民地にするために争っているのだと知った。谷は朝鮮併合の急先鋒である父に逆らって、帝国主義日本への反省が脳裏をかすめた。谷の眼から見れば、安南人を奴隷扱いするフランスが決して良国ではなかった。当時フランスはプロシアに大敗して以来、統一されたドイツの軍事的脅

威に常に脅かされていて国内では復讐の準備を整えていたのである。

明治45年5月、小牧の父栄次が国会議員の選挙に落選し家運も傾き、小牧には日本から送金が途絶え、彼はブルジュアの学校からパリの下町に放り出された。すなわち物語の主人公はパリの屋根裏部屋での日銭を稼いで暮す生活に入る。しかも谷は、戦争に突入するフランスで外国人として生活しなくてはならない。

1914（大正3）年7月31日には、戦争反対の平和主義者ジャン・ジョレスが暗殺されると、国勢は一気に戦争に傾き、8月3日にはドイツがフランスに宣戦布告する。パリの窓々にはフランス国旗が翻り、日本が参戦すると谷を日本人と知る人からは、「日本万歳」の声がかかる。しかし、谷には、日本のヨーロッパへの出兵の理由がわからなかった。フランス人の中には「日本は余りに人口が多過ぎる。その過剰な血を少しばかり正義のために流してもいいのではないか」と言う人もいた。しかし、パリの下町で暮す谷には血の多少ではなかった。ドイツ人のエルンストは黙って谷の前から姿を消した。親しかった床屋のマスターも軍隊に入ってしまった。そして街には負傷兵も珍しくなくなった。停車場には白衣の看護婦が立っていた。しかし、それだけではない。1914年の諸聖祭には喪服姿が目立つようになってきた。そして彼女たちの悲しい表情は眼を開けて見ていられるものではなかった。めいめいの不幸を国家の悲しみと一緒に背負うからか、その重さで首は深く曲がっていた。

日清戦争、日露戦争を戦ってきた国の青年谷は、異国フランスで戦争の悲劇を体感し、平和主義者に成長して行くのであった。